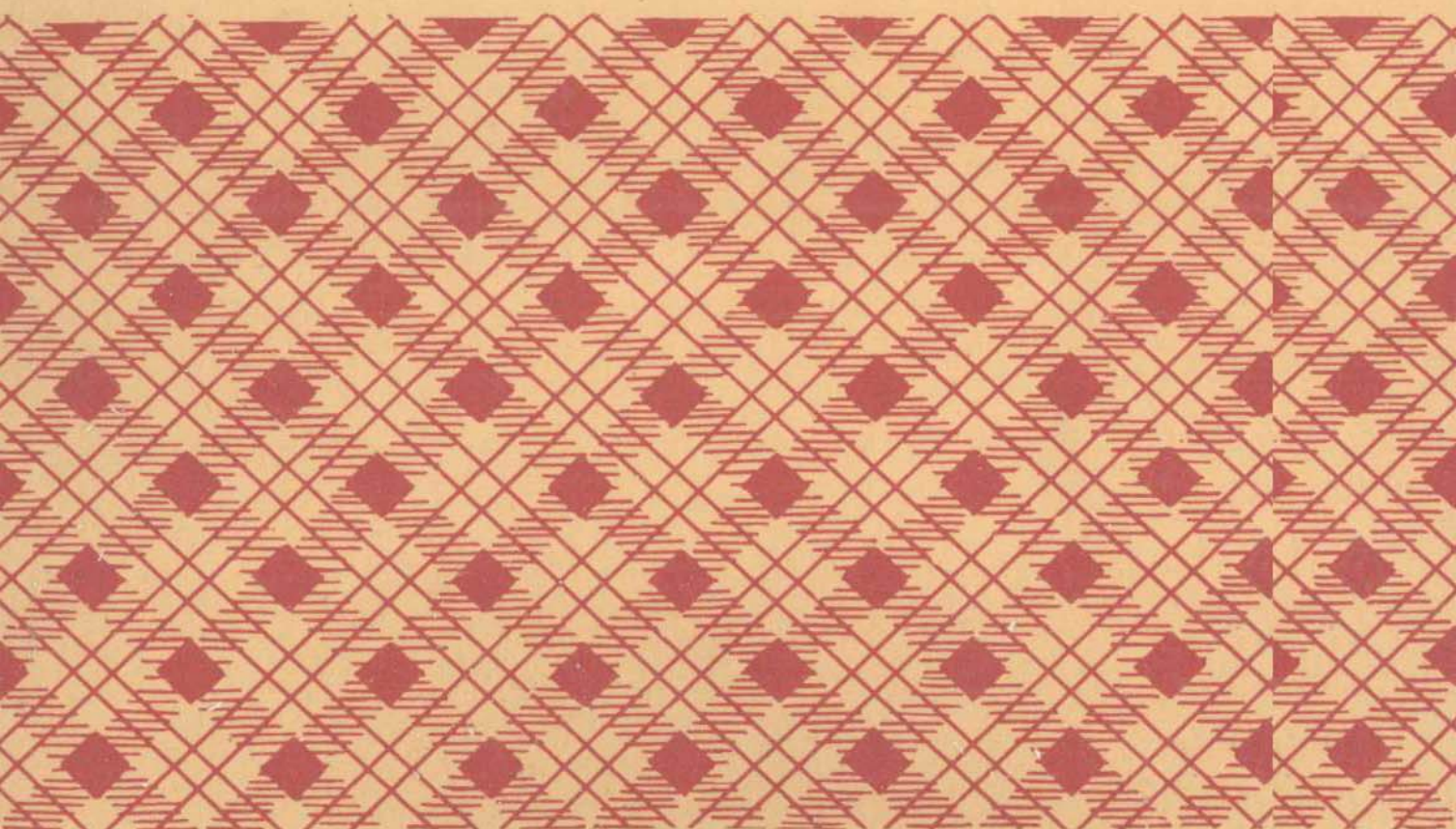


私—わたし—

西 川 澄 子



* KIMOTO BUNKO

秋元文庫

私—わたくし—

西川澄子



秋元書房

秋元文庫

私—わたくし—

昭和49年 2月20日第1刷発行

昭和49年 6月30日第2刷発行



定価はカバーに表示してあります。

■著者紹介

西川 澄子

(にしかわすみこ)

この小説「私」は「婦人生活」懸賞小説入選作にさらに手を加え書きたした長篇。

これがはじめての小説。

著 者 ■ 西 川 澄 子

発 行 者 ■ 秋 元 英 子

発 行 所 ■ 株式 秋元書房
会社

■ 〒162 東京都新宿区赤城下町42

電話 東京(268)0758(代)

振替 東京 27047

乱丁、落丁本はお取替えいたします。

印刷=暁印刷 製本=大和工業

© SUMIKO NISHIKAWA 1974

0193-B010-0029

秋元文庫

私—わたくし—

西川澄子



秋元書房

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

私はムコである	9
フィアンセ拝見記	14
姉の恋愛	19
ムコはまだ子供	23
手品	26
つるバラの家	28
放課後	31
仮病の安売り	33
サイクリング	39
父の説教	45
嵐	48
先生の結婚	50
父母の恋愛	56
手相	64
娘の気持	67
チューリップ物語	72
とじこめられた青春	79

お客様	83
職業鑑定	88
デイト見学記	99
夜の道	106
手紙	110
パーティ	119
夏の朝	132
失敗	133
キャンプ	139
青春の宴	143
変な私	152
花	153
ある夜の出来事	159
来訪	166
ジンとワイン	174
初化粧	179
兄の秘密	186
青いシグナル	204
出産	206

雨 姉 姉
の 姉
結 姉
婚 姉
く 姉
ち 姉
づ 姉
け 姉

226 219 214

カバール・さしえ
みつはしちかこ

私
—わたくし—



主要人物

わたくし——私のニックネームは「息子」。それをもじって「ムコ」とも言う。三人兄妹の末っ子で十七歳。人一倍背が低く、アマノジャクで毒舌家どくぜつかで、お転婆てんぱで、およそ可愛い娘には縁遠い存在である。

父——会社の重役で、理想家肌の人物といわれている。父は、私と顔が合うと、すぐ、もっと女らしくしろという。私はこの女らしくという言葉がきらいだった。

母——私の「ムコ」というニックネームに一番ショックを受けたのはご本人にあらず、明治生れの母だった。なぜなら母は私を姉同様に、女らしい娘に育てるのが望みだったからだ。

姉（直子）——勤めに出ている姉は、目下恋愛中らしい。はっきり聞きただしたわけではないが、私の第六感にはそううつった。なぜなら日に何度も鏡をのぞく。眼の大きい姉は、いっそう大きく、美しく見せようと、アイラインを入れたり、まつげを器具でひっくりかえしたりしている。

兄——大学に行っている兄は、私に甘い。そのせいか私も兄が一番好きである。古木利也——兄の友達の大学生。私は、彼と夜道を一緒に歩いたことがある。

彼が無口だということは兄から聞いていたが、あんなに無口だとは思わなかった。私はそっと彼の横顔を見た。鼻筋ががっしりと通り、油っけのない毛髪が夜風にさらさらとゆれていた……

私はムコである

私のニックネームは、「息子」である。それをもじって「ムコ」とも言う。

誰言うことなくこう呼び出してから、はや二年になる。最初のころは級友の間で使っていたのが、いつのまにか家の人にも伝染し、こう呼ばれるようになってしまった。

このニックネームに、一番ショックを受けたのは、ご本人にあらず、明治生れの母だったらしい。なぜならば、母は私を姉同様に、女らしい娘に育てるのが望みだったから。

だが、そうは問屋がおりさなかった。三人兄妹の末っ子に生れた私は、人一倍背が低く、アマノジャクで、毒舌家で、お転婆で、およそ可愛い娘には縁遠い存在だった。だから私と同年配の乙女が、恋に胸をときめかすとき、私はその日のお弁当のおかず、胸をときめかした。

また通学のときは、大学に行っている兄の哲学の本や、外国語の小説等をこわきにかかえて、通った。乗物の中で、これらを膝の上に広げ目を通す。目を通すというよりは、字をながめるといったほうが適当かも知れない。私が意味もわからず、伊達にこれらの本を、持ち歩いているとは誰も気づくまい。それがまた、私の自慢の一つだった。

私の姉はいま恋をしているらしい。まだはっきり聞きただしたわけではないが、私の第六感にはそううつった。私の勘でいうと、恋をしている女性は、まず日になんども鏡をのぞく。にきびがふえていないか、ひげがつまめるほどのびてはいないか、目が美しく澄んでいるかどうか……。眼の大きい姉は、いっそう大きく、美しく見せようと、アイラインを入れたり、まつげを器具で、ひっくりかえしたりしている。

それにくらべると私は鏡にとんと縁がない。朝、洗顔後にお義理で一ぺんのぞくのが関の山である。冬などは、タオルのはしをすこしだけ濡らし、その部分で目とよだれのあとを、ちょっちょつとぬぐう。これが私の洗顔法であり、化粧法でもある。

私は、姉とちがって美しくない。その証拠に、近所の幼ない子供のモデルになって描いてもらった私の顔は、カップに似ていた。

その子曰く、

「お姉ちゃんの口、どうして出てるの？」

私はさほど腹もたてずに、

「齒に聞いてごらん」

と、口をアーンと開けてみせた。

容姿がすぐれないせいもあるが、私は恋愛に対し自信がなく、それだけに恋愛に対してあまり関心がなかった。

それゆえ、異性に対しても、特別の感情をいだいた記憶がない。兄のところにくる男の友人たちとも、「オッス」のあいさつで通っている。

春雨のけぶる午後。母に三拝、九拝された私は、しぶしぶ兄に傘を持っていくことになった。

風呂敷に雨靴を入れ、大きい洋傘を手にとって、はげしい雨の中へと向った。雨の中に、そびえる鉄筋コンクリートの建物は一目で大学とわかったが、一見刑務所のような無気味な感じがした。

私は校門に入ってはたと困った。大学にきたのは初めてだし、兄がどの教室かさえ聞かずにきたのだ。

当って碎ける、特攻隊だ……と一人意気ごみ校内にまっすぐ足を入れた。八ッ手や、そてつが大きく育ち、いかにも男性の園らしいたくましい、感じがする。

玄関で、しばらく待っていると、兄は見知らぬ学生と談笑しながら出てきた。

「兄さん」

「おお、ムコ」

兄は私の大声におどろいたらしく、片手を、ふり上げて近よった。その声に、三々五々帰りかけた学生が足をとめて、こっちを見た。

「待たせるだけ待たせといて、『おお、ムコ』じゃないわ。罰として大通りまで、おぶって行きなさい」

「馬鹿な、みんな見てるじゃないか」

「平気よ、そのつもりでズボンはいてきたんだから……」

「家の近くからでいいだろ。いいね。いい娘だから……」

兄は私に甘い。そのせいか私も兄が、一番好きである。

兄が連れの学生を紹介してくれた。が、私はそんな名前なんか、すぐ忘れてしまった。私は、水たまりをよけて、溝の横にある細い通りを選んで歩いた。後で兄の声がきこえた。

「アマノジャクで、こまるんだよ。あれだよ、見てくれ、ズボンに鳥打帽だろう。おまけに髪は坊主ときてる」

「ほう、どうして？」

「あれの友人がね、男の人はロングヘアーの人が好きらしいから私ものばすの……と言ったらし

いんだな。それを聞いたら急に、短く切りたくなっただって……」

学生は、笑っているらしい。兄はとくとくと話をつづけた。

「家に帰ると、いつもあんな格好しているんだ。ビー玉はするし、チャンバラごっこはするし、裸で家じゅう飛びまわるし。あれで……」

「花はすかしい乙女かって、言いたいんでしょう？」と、私。

「ご名答」

「弁当のおかず、何だったの」

「さあ、てんぶらかな」

「でしょう。その上にバターまぶしてたのよ、きつと」

兄は学生と目をあわせ苦笑した。

兄におぶられて家についたのは、七時を少し過ぎていた。

「お父さん、ただいま」

「ああ……またそんな格好で学校まで、行ったのかい？」

「うふん……さ、ビール出してこよつと」

父は私と顔が合うと、やれ髪をのばせの、もっと女らしくしろと言う。私はこの女らしくと言う言葉がきらいだった。この言葉より、その後に来る言葉がきらいだったから、おのずと「女らしく」がきらいになったのかも知れない。その後に来る言葉、それは「もらい手がなくなるよ」だった。

「はい父さん、コップ……ついであげるね」

「うん、ありがとう。ネ、ムコ、もっと女らしくおし……お前だってもうすぐ十八だろう。そんなになっていると貰い手がなくなるよ」

「ほらまた十八番が始まった。いいんだってば……反対にわたしが貰ってやるんだから……」

「お前も困った子だよ。どうも……」

「おれに似ちゃったらしいでしょ？」

みんな笑った。

「直子には十七才くらいから、縁談があったけど、お前にはひとつもこないらしいね」

「それだけわたしの価値が、わかる人がいないのよ」

黙って食事をしていた兄が口を切った。

「おいおい、いいのかい、そんなこと言って」

「だってそうでしょ。しかたないわ」

「だいたいお前は冷たい感じがするんだよ」

「でしょ。冷たいって言うのは、理知的なものにも相通じるんですってさ」

「こいつ、しょってらあ」

兄は私の頭をわしづかみにして左右にふった。私はケッケケとかっぱのようになり、笑った。その笑い声がおかしいと言って皆はまた笑った。だが、私は心の底から笑ってはいなかった。私にだって感情はある。自尊心もある。結婚する意志はないが、心のどこかに、他人から自分を求められたいという気持はあった。

フィアンセ拝見記

けさ、休み時間に級友の一人、園子が私に言った。

「ねえムコ、わたしの姉さんね、見合するんですって」

「へえ、誰と？」

「一人はドクトルのヒヨコ、この人は母さんの勝手にきめた婚約者候補、もう一人は銀行マンよ。でね、わたし一目見たいの」

「まだ見てないの？」

「うん、だって昨夜母さんと父さんと、話してるの耳にはさんだの。わたしね、写真見たんだけど……実物がどんなかしら？」

授業のベルがなった。園子はさっと自分の席にかえった。授業は英語である。

私は本をひらいて机に立て、その下で手紙を書いた。

「園子、さっきの話ね、きょう学校帰りに、会いに行こうよ。ムコ」

私はその紙切れを、細く長々と折り、先生が黒板に向ったすきに、園子になげてやった。ところがである。

先生は、黒板なんか見てなかった。体は向いてたけど、顔はこっちを見まわしていた。

「スタンダップ」

「イエス・サー」

私は立ち上った。